

## 黒田宇都宮和睦附宇都宮父子傷害之事

右の趣、黒田孝高より殿下秀吉言上ありければ、秀吉聞給ひ、宇都宮は代々武功の家なれば、たやすくは攻落がたかるべし、謀計を以て討取べしとの上意なり。かくて黒田より和睦すべきよしたびたび云賜ると云へども、鎮房曾て同心せず。よって、殿下より宇都宮へ本領安堵の御朱印を賜り、かさねて仰出さる趣は、宇都宮鎮房に娘有よし長政に嫁すべし。此上は宇都宮、黒田双方遺恨有べからず、早々和睦有べきとの上意たれば、黒田より三宅三太夫を使として、鎮房に上意の趣、具に達しければ、この上は疑所なしとて、三太夫に對面し、兎も角も御計ひ次第と有ければ、三大夫早速中津川に歸り、孝高に首尾の趣申ければ、喜び、則祝儀として砂金巻物数を尽くして贈られける。其後は背信の絶へ間もなし。鎮房父子を始、諸士に至るまで、安堵の眉を開きける。其後、程なく婚姻相整へ、双方他事なくぞ見へにける。また、宇都宮父子を長政館へ請待有べきと、日限既に定めし所に、又、秀吉より肥後国佐々内蔵介成政が領分検地の事、宇都宮朝房を頼思召しの上意なれば、いよいよ殿下のおぼしめし宜敷故と心得、早速御請申して、天正十七年四月十一日朝居城井を發馬有て、肥後国へぞ趣かれける。

相従ふ人々には、高司日向守、池永善内、小路源次郎、松田弥五郎、  
神崎覚左衛門、畑中六郎右衛門、寺野幸介、近見新六、白川作大夫  
等を先として、其勢百五十騎にて越られける。然る所に、孝高より  
錨毎へ中越されけるは、兼ねて日限相定候通り、本月二十日招請申  
すべしと有ければ、鎮房返答に、此節、朝房肥後国へ罷越候間、返  
り次第に参り申すべしと有ければ、孝高重て申されけるは、兼ねて  
日限を定、御契約申合置候、親子の對面延引に及びなば、殿下への  
聞へ如何有べき。是非御越しかるべきと、使者度々に及びければ、  
鎮房も家臣を集め評議有けるに、芳賀四郎右衛門進出て申しけるは、  
今度の上意一円心得がたく候。知行所検地の沙汰もなく、黒田へ和  
睦して当城を空け御父子左右にいでたち給うこと、当家一世の越度  
たるべきか、是非とも君は病気のお断り申され、朝房肥後より帰城  
有て後、巾津川へ御越有て然るべきと申しければ、伝法寺兵部申け  
るは、期に背くは信を失するなり。公命といひ、期役といひ、かた  
がた以大切なりと謂募れば、評議一決せず、其日も暮に及びける。  
黒田よりは三宅三大夫使者に來り、言葉を尽くしてすすめ申しけれ  
ば、鎮房是非に及ばず。中津川へぞ赴かれける。供奉の人々には、  
渡辺右京進、神崎三郎兵衛、松田壹岐守、同小吉、遠藤伊賀守、同

源兵衛、石井清左衛門、権大宮司右衛門大夫、中野与吉郎、都留与左衛門、野田折助、小柴大蔵、笛吹勝吉、則松和泉守、白川遠江守、屋那治永馬、榎木新左衛門、榎本五郎兵衛、其勢百五十人にて、四月二十日中津川の城に入給へば、長政出向ひ、上瀬の間に清□□□□杯膳の上にて、長政の家人曾我太郎兵衛太刀を取直し、上意なりと呼つて討てかかる。鎮房心得たりと抜合せ、曾我が太刀を受留めて、この太刀にて曾我が髮先をしたたかに切る。兼ねて用意の事なれば、黒田の勇士多勢にて切てかかる。終に鎮房を打留めたり。爰に鎮房の小姓松田小吉といふ者、生年十六歳、只一人次の間に居たりしが、奥の間の騒動を聞き切て人、手の下に十九人切伏せ、其身も終に討れけり。供の士はここかしこ響応の間をこしらへ、分置て多人数を以て、一人も残らず討取けり。其中にも廣運寺まで来り腹切りて死にける。かくて長政は、手勢数多引供し、城井の城に押寄、留守居池永善左衛門を呼出し、鎮房の父、長甫事は老体の儀なり。その外は皆女性の事なれば、別儀ならじといへども、上意なれば残らず此方に預り申すべしと有ければ、長甫も今は詮方なく、中津川へぞ趣かれける。錐居の内室朝居の内室息女二人いづれも中津川へ趣かれける。其内に朝房の内室は年来召し仕の女に取替えて落しけ

る。其故は内室懐胎にて有ければ、自然男子誕生有らば、時至て宇都宮の家名再興の事もやあらんと長甫善左衛門がはからひにて落しけるが、つれなき命助り、男子誕生をぞ待にける。さて、朝房はその日・肥後国玉名郡小柴の宿にて・大勢押寄戦ひけるが思ひがけなき事といひ、多勢に取籠られて、朝房主従一人ものこらす討れにけり。嗚呼此日いかかる日ぞや。天正十七年四月二十日当国累代の宇都宮氏、此彼處にて滅亡し畢ぬ。扱其後、鎮房の息女を中津にて獄家に籠置しに、大工の物作る音を聞、何やらんと、番の者に尋ね給ふに、あれは機木を作り侍る者也と答へければ、息女の歌に、中々にきいて果なんから衣、たがために織るはた物の音。

その後、廣津川原にて、磔にかけられたり。哀れなりし事ども也。今の小犬丸村宇賀神、その事績なり、かくて黒田孝高父子は領内の一揆事故なく打亡て、その余党といへども、根を断て葉を枯しければ、今は中津川の居城も安穩にぞ成にける。

雨 豊 記 卷之 20 天正 17 年